

蜜柑の花

池松孝子

西伊豆スカイラインは、交通量が少なくて天気恵まれれば富士山や駿河湾を望める。土肥峠から戸田峠の標高八百メートルの稜線を走る絶景ラインだ。きらきら青く輝く駿河湾の向こうに大きな富士山が迫ってくる。駿河湾越しに静岡市、時には南アルプスも楽しめる。ここを走るときは運転席に座るもよし、隣の席で次々と開けていく窓の外を堪能するのよし。

開花時期の五月になると、蜜柑の木々の茂みの間から小さな薄緑の花のつぼみが見え隠れする。そのつぼみがゆっくりほぐれていく。よく見ると白い肉厚の五弁の花びらがあるところどころ重なりあっている。それはまるで花びら同士が寄り添っているようで心が揺さぶられる。一年を通して緑のこんもりした蜜柑山だが、初夏にだけ主人公となる白い花がいじらしい。濃い緑の葉の間に見える花からは、ジャスミンのようなさわやかな甘い香りが海風にのって漂ってくる。柑橘系の香りは万人に人気なのだが、本物の蜜柑の香りに勝るものはない。

山匂ひ海まで匂ひ花蜜柑

嶋田一步

車窓に流れ来る柑橘の独特の香り、頂きに雪を残す富士山、輝く駿河湾を満喫しながら走るとき、大きな声で歌いたくなるっておきの歌がある。そう「みかんの花咲く丘」である。加藤省吾作詞、海沼実作曲で昭和二十一年、伊東行きの車内で書かれ、車窓にみかん畑が現れた宇佐美あたりで曲は完成したという。暖かい歌詞とメロディがいい。終戦直後も伊豆の山は今と変わらぬ景色だっただろうか。私は東伊豆を走る時より西伊豆を走る時にこの歌に思い出す。

かつて母が上京すると、いつも伊豆、箱根をドライブした。今でも、後ろの席に座った母の笑顔をミラーに見ながら車窓を共に眺めた日々を思い出す。伊豆の景色とこの歌詞が心に沁みてなつかしい。青い空、碧い海に感激していた母を思い出し、胸に迫るものがある。

いつか来た丘かあさんと一緒に眺めたあの島よ

今日も一人で見ているとやさしいかあさん思われる